様　式　Ｃ－１９、Ｆ－１９－１、Ｚ－１９　（共通）

科学研究費助成事業　　研究成果報告書

平成 ３０ 年　 ５ 月　 １ 日現在

機関番号：３４３０４
研究種目：若手研究(B)
研究期間：2014～2017
課題番号：２６７７０１１０

研究課題名（和文）銀板写真と19世紀前半のアメリカ文学

研究課題名（英文）The daguerreotype and American literature in the early half of the nineteenth century

研究代表者
宮澤　直美（MIYAZAWA, Naomi）

京都産業大学・外国語学部・准教授

研究者番号：５０６３３２８６

交付決定額（研究期間全体）：（直接経費）　　2,700,000円

研究成果の概要（和文）：1839年の銀盤写真の登場が19世紀前半のアメリカ文学に与えた影響について研究した。2度の米国での資料調査では、当時の銀盤写真に関する反応を明らかにするため、新聞、雑誌、写真などを広く調査した。新たな歴史的資料を発見することができた調査の成果を、3本の論文にまとめた。1840年代のフィラデルフィアにおける銀盤写真家、肖像画家と作家との関係を分析した論文では、写真が直接登場しない作品においても、写真というこの新たな表現媒体が暗示的に示され、その影響を読みとることができる点を指摘した。新たな作品の読み方を提示すると同時に、視覚芸術と文学ジャンルの連動性を提示した。

研究成果の概要（英文）：This research focused on how the introduction of the daguerreotype in 1839 affected American literature in the early half of the nineteenth century. I took two research trips to the US and examined vast collections of old newspapers, journals, and photographs, to understand contemporary responses toward the daguerreotype. I wrote three essays based on these new findings. In one of my essays, I analyzed the relationship among daguerreotypists, portrait painters, and writers in 1840s Philadelphia and pointed out that even though there are no direct references to daguerreotypes, some texts indirectly show the influence of this new process. I proposed a new method of reading literary texts while trying to highlight the intertwined relationship between visual art and literature.

研究分野：アメリカ文学

キーワード：アメリカ文学　銀盤写真　肖像画　エドガー・アラン・ポー

１．研究開始当初の背景

（１）研究代表者はこれまで 19 世紀前半のアメリカ文学、特にナサニエル・ホーソーン、エドガー・アラン・ポー、ハーマン・メルヴィルを中心に、文学と擬似科学、都市化の関係性を研究してきた。ニューヨーク州立大学バッファロー校に提出した博士論文（2010 年）ではポーを中心に、都市文化や骨相学やメスメリズムといった擬似科学が文学に及ぼす影響を研究した。博士論文での研究をさらに発展させるため、2013 年-14 年度の科研費「研究活動スタート支援」（課題番号 24820062）ではエドガー・アラン・ポーのメスメリズム（動物磁気学）への関心とその創作論との関係を研究した。その課程で、ポーとメルヴィルの比較を行うシンポジム参加の機会に恵まれた。同時代作家の比較を続けた結果、彼らの作品に共通する銀板写真への関心というテーマが浮上してきた。修士論文では、ホーソーンと光学装置（ファンタスマゴリ、幻灯機、銀盤写真）に取り組み、光学装置と作家の関係性には以前から関心を持っていた。本課題では、同時代作家全般に対象を広げ光学装置と文学の関係性を検証することとした。

（２）研究開始当初、銀板写真と 19 世紀アメリカ文学についての研究が次々に発表された。例えば、ポーを取り上げた Kevin J. Hayes の“Poe, the Daguerreotype, and the Autobiographical Act”(2002)、ホーソーン論である David Collett の“The Daguerreotype and Nathaniel Hawthorne’s Study in Contrasts”(2012)、作家間の比較研究である Marcy J. Dinius の The Camera and the Press：American Visual and Print Culture in the Age of the Daguerreotype（2012）などである。本研究は、こうした研究動向を踏まえ、個々の作家に留まらず 19 世紀前半の作家を網羅し、比較検証する重要性を強く意識した。作家同士の比較を、銀板写真を通して行うことで初めて見えてくる 19 世紀前半の大きなアメリカの構図を掴みたい。こうした研究が、まだ包括的なレベルでは達成されていない点に着目し、本研究ではポーやメルヴィル、ラルフ・ウォルドー・エマソンらを含むより大きな視点から、銀板写真と 19 世紀前半アメリカ文学の関係を研究することとした。

２．研究の目的

本研究は、19 世紀前半のアメリカ文学に銀板写真が与えた影響について研究することを目的とする。1839 年、フランスのルイ・ジャック・マンデ・ダゲールによって発明されたとされる銀板写真の登場を、人々はどのように受け止めていたのか。一次資料をもとに当時の銀盤写真に対する反応を探り、作家の反応と比較する。その上で、反復、仮面、死者の復活といった文学的なテーマが銀盤写真の登場とどのように関連しているのかを明らかにする。また、大きな目的としては、魔術的な力とリアリズムの要素を同時に兼ね備えた銀板写真の登場が、ロマン主義からリアリズムへの移行期の作家たちに、どのような影響を及ぼしたのかを明らかにすることを目指した。ホーソーン、メルヴィル、ポー、エマソン、そしてファニー・ファーンら女流作家らの作品、手紙、手記に加え、当時の銀板写真に関する一次資料を分析し、文学への影響を考察する。実物を写像として銀板や紙の上に固定させる写真が、二重(多重)人格、仮面、反復や詐欺、死者の蘇りといった文学テーマとどのように関係しているのかを包括的に検証し、19 世紀アメリカ文学の新たな解釈可能性を切り開くことを最終的な目的とする。

３．研究の方法

作家と銀盤写真との関係を調査するためには、文学作品だけを研究対象とするのでは不十分である。当時の銀板写真についてどのような文化的な言説が流布していたのかを調査するため、作品精読、先行研究調査に加え、19 世紀前半の広告、日記、雑誌、新聞、パンフレットなどの一次資料を収集し、当時の文化的言説の包括的理解を進める。主な資料の調査先は、東京都写真美術館、米国ロチェスター大学 George Eastman House Library Rare Books、ニューヨーク公立図書館である。

４．研究成果

（１）平成 26 年度は、米国ロチェスター大学 George Eastman House Library Rare Books、ニューヨーク公立図書館 Stephen A. Schwarzman Building で調査を行い、1840 年代の銀板写真家が残した作品や当時の新聞記事など貴重な資料を数多く収集した。George Eastman House Library Rare Books では、1840 年代から 60 年代のカメラ、ポーの銀板写真、1839 年にダゲールが写真のメカニズムを明かした The Daguerreotype 初版本、1850 年刊行の初の写真専門雑誌 The Daguerreian Journal など、当時の様子を伝える未出版の多くの貴重資料を調査することができた。ニューヨーク公立図書館 Stephen A. Schwarzman Building では、図書館内でのみ閲覧可能な American Periodicals (1740 年から 1940 年の間、アメリカで出版された新聞・雑誌・パンフレット等の出版物を包括的に網羅するデジタルサイト)、及びマイクロフィルムで、当時の銀板写真が一般的にどのように受け止められていたのかを調査した。その結果、ポーとも親交が深かった画家トーマス・サリー、ロバート・サリーの関連資料を発見することができた。当時の肖像画と銀板写真との関係性に新たな視点を見出すことができる資料であった。銀板写真

のみならず、視覚芸術というより広い視点から今後の研究を進めていくべく、軌道修正をする重要な発見となった。夏以降、持ち帰った資料の分析と論文執筆に取り掛かった。

（２）前年度の日本ポー学会での口頭発表に加筆修正を加える形で出版された論文「ポーとメルヴィルにおける詐欺師たち」『ポー研究』(5,6 合併号)では、両作家が取り上げた詐欺師というテーマが写真の登場とどのように関係しているのかを考察した。具体的には、詐欺に関連する作品と、顔を紙面に複製する媒体としての銀板写真に対する両者の反応の違いを取り上げ、詐欺する行為、反復する行為を作家として詩人としてどのように両作家が受け止めていたのかを分析した。

前半は、ポーの気球物語に代表されるホークスものをはじめ、詐欺に関連する作品を中心に、ポーの「迫真性」(verisimilitude)という概念を考えた。ポーにはホークスや詐欺をテーマとした作品がある。４月１日のエイプリル・フールズ・デイを舞台とする「ハンス・プファアルの無類の冒険」(1835)や「軽気球夢譚」(1844)は気球船のホークスであるし、また「実業家」(1840)や「メルツェルの将棋差し」(1836)などは詐欺的要素を題材として用いている。こうした作品に加えて小論「純正科学のひとつとして考察したる詐欺」(1843)では、詐欺を科学として分析し、「人間は詐欺する動物である」、「詐欺することは人間の運命である」(Poe, Edgar Allan. Collected Works of Edgar Allan Poe. Ed. Thomas Ollive Mabbott. Cambridge, Mass.: Belknap Press of Harvard UP, 1969. volume 2, p.869)という印象的な言葉を残している。ポーのこのような作品を対象として、まずポーと詐欺、「迫真性」というテーマを考察した。

そして後半は、メルヴィルの『信用詐欺師』と銀板写真に関するポー、メルヴィル両者の言及に注目し、反復すること、本物と偽物という問題に取り組んだ。銀板写真発明の翌年5 月にポーが執筆した“The Daguerreotype”を含む両作家の銀盤写真に対する言及箇所に注目し、両作家の銀盤写真に対する異なった反応を明らかにした。肖像画家の仕事を奪い、顔を「見る」「写す」という行為の意味を根本的に変え、その後のリアリズムの立役者ともなった 1839 年の銀板写真の登場と文学作品との関わりを明らかにする一つの試みであった。

（３） アメリカ人でありながらも、その生涯のほとんどをフランスで過ごしたガートルード・スタインと、彼女が敬愛した作家ポーとの接点を調査し、論文「ガートルード・スタインにおけるパリとボルチモア」にまとめた。「アメリカは今や世界で一番古い国」(“The United States is just now the oldest country in the world”)(“Why I Do Not Live in America” 51)だとして、アメリカではなくパリで執筆活動することを選択した彼女にとって、祖国アメリカ、そしてアメリカ文学はどのように位置づけられるのだろうか。そしてフランスとアメリカ双方の空間はいかなる場所として受け止められ、作品制作に影響を与えていたのか明らかにすることを目標とした。

論文ではまず、内側と外側に空間を二分する彼女の空間意識を確認し、自己規定の要素としてパリの部屋が創作活動に果たした役割を分析した。次に、スタインのアメリカに対する意識を検証するために、1934 年から1935 年のアメリカン・ツアーを中心に、その前後に書かれた作品を考察した。最後に、一方でアメリカを拒絶しながら、他方でアメリカ文学の流れのなかに自身を位置づけようとした文学者としてのスタインの交錯した感情を、ウォルト・ホイットマンとエドガー・アラン・ポー評価を通じて明らかにした。特に後者については、ポーの『大鴉』(The Raven 1845)へのスタインの関心と、スタインがポーの母校ヴァージニア大学講演で用いた題目「詩と文法」(“Poetry and Grammar” 1935)と『大鴉』との共通点に着目し、アメリカよりもフランスでその才能を見出されたポーとスタインの共通点を探った。

（４）平成 27 年度は、8 月末から 9 月初旬にかけての米国での資料調査と帰国後の資料分析を中心に研究を進めた。米国では、フィラデルフィア公立図書館(Philadelphia Free Library)、エドガー・アラン・ポー国立歴史地区(The Edgar Allan Poe National Historic Site)、ニューヨーク公立図書館などを訪れ、1840 年代から 1860 年代の銀板写真関連の資料を収集した。特にニューヨーク公立図書館内のバーグ・コレクション(Henry W. and Albert A. Berg Collection of English and American Literature)と、貴重書部門(Manuscripts, Archives and Rare Books Division)では、ポー、ホーソーン、エマソンと視覚芸術に関連する貴重な資料を読む機会に恵まれた。また、初期の銀板写真家の多くを排出したフィラデルフィアでは、チェスナット通り界隈で調査を行い、同地に住んでいたポーの作品が当時のフィラデルフィアから受けた影響を考察する上で重要な調査ができた。これらの調査結果、資料を帰国後に分析し、19 世紀前半のアメリカ文学に銀板写真が与えた影響について新たな解釈を示すべく論文執筆作業にとりかかった。資料分析の他、写真と文学の関連性についての先行研究を体系的に網羅するために伊藤詔子、Michael J. Deas, Barbara Cantalupo, Susan Elizabeth Sweeney, Susan S. Williams, John Tresch らの研究書にあたり執筆を進めた。直接的に写真が作品に登場しない作品にも、写真という新たな表現媒体が与えた影響を読みとることができる点を、

「楕円形の肖像」「黒猫」などの作品に即して明らかにし、新たな作品の読み方を提示すると同時に、視覚芸術と文学というジャンルの連動性を示すことを目指す論文を執筆し、米国雑誌に投稿した。

（５）米国雑誌 Poe Studies: History, Theory, Interpretation に投稿していた英語論文が査読審査を通り、平成 29 年 3 月に 2 回目の修正作業を終え、平成 29 年末に出版された。ポー研究の国際的学術雑誌として権威ある本雑誌への掲載は、本研究の大きな成果と言える。本論文は同時代作家ナサニエル・ホーソーン、ラルフ・ウォルドー・エマソン等の先行研究を踏まえた上で、1840 年代のフィラデルフィアにおける銀盤写真家、肖像画家、そして作家ポーの関係性を新たな歴史的資料に基づいて論じたものである。平成 26 年度及び 27 年度のロチェスターのジョージ・イーストマン・ハウス貴重書図書館、イェール大学美術館、ニューヨーク公立図書館貴重書部門、フィラデルフィア等での渡米調査によって得られた一次資料の分析が大きく貢献していることは言うまでもない。また査読過程で指摘された文献を精読することによって、当時の銀盤写真に関して最新の研究を踏まえた多角的な視点を持つことができたことは、本研究を進める上で大きな助けとなった。哲学や心理学と視覚芸術論を結びつける先行研究にあたったことで、今後の研究の方向性を考えていくうえでも大きな示唆を得ることができた。

５．主な発表論文等
（研究代表者、研究分担者及び連携研究者には下線）

〔雑誌論文〕（計　３　件）
①　Naomi Miyazawa
“ Poe, the Portrait, and the Daguerreotype: Poe’s Living Dead and the Visual Arts” Poe Studies: History, Theory, Interpretation(50), pp.88-106 2017 年
査読有り

② 宮澤直美
「ガートルード・スタインにおけるパリとボルチモア」 津田塾大学言語文化研究所報(31), 25-35 頁 2016 年 査読なし

③ 宮澤直美
「ポーとメルヴィルにおける詐欺師たち」
ポー研究(5,6), 62-72 頁 2014 年 査読なし

６．研究組織
(1)研究代表者
宮澤　直美（MIYAZAWA, Naomi）
京都産業大学・外国語学部英語学科・
准教授
研究者番号：50633286